

小林 登
(Kobayashi Noboru)



チャイルド・リサーチ・ネット
(CRN) 所長

医学博士。東京大学名誉教授。国立小児病院名誉院長。チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)所長。ベネッセ次世代育成研究所所長。子どもの虹情報研修センター(日本虐待・思春期問題情報研修センター)センター長。日本子ども学会代表。日本赤ちゃん学会名誉理事長(前理事長)。日本母乳保育学会名誉理事長(前理事長)。日本子ども虐待防止学会名誉会長(前会長)。

1954年東京大学医学部医学科卒業。東京大学教授、国立小児病院医療センター初代センター長、国立小児病院院長、国際小児科学会会長などを歴任。日本医師会最高優秀功労賞(1984年11月)、毎日出版文化賞(1985年10月)、国際小児科学会賞(1986年7月)、勲二等瑞宝章(2001年秋)、武見記念賞(2003年12月)などを受賞。

主な著作は、小児医学専門書以外には「ヒューマンサイエンス」(中山書店)、「子どもは未来である」(メディアサイエンス社)、「育つ育てるふれあいの子育て」(風濤社)、「風韻怎思—子どものいのちを見つめて」(小学館)、「子ども学のまなざし」(明石書店) その他多数。

人間は何故心をもったのだろうか、脳の三位一体学説から情動の役割を考える

私達人間は、豊かな心をもって家庭を築き、社会を営み、文化・文明をつくり上げて生活している。同時に、残念なことであるが、世界のどこかには必ず戦争のような悲劇も起こっている。そうした問題を考えるには、脳進化、進化心理学、霊長類学のような、人間科学としての学際的な学術体系が重要な役割を果たす。P.D. MacLeanは、それを“The Triune Brain in Evolution”(1990)としてまとめた。この「脳の三位一体学説」を、私なりに考え、わかりやすく説明すれば、次のようになろう。

脳は脊椎動物になって現れ、魚や爬虫類のような、生きるため、体を動かすための体のプログラムだけの「生存・運動脳」と呼べるものから始まった。哺乳動物になって、仲間との関係を保ちながら、生存競争に勝ちたくましく生きるため、体のプログラムの働きをよくする本能・情動の心のプログラムをもった古い皮質(大脳辺縁系)に生存・運動脳がカバーされ、「本能・情動脳」が出来た。そして、自然に適応し、同種ばかりでなく異種の動物とも関係を保ちながら上手く生存していくため、本能・情動脳が知性・理性の心のプログラムをもった新しい皮質でカバーされ「知性・理性脳」が出来、三層構造からなるわれわれの脳の原型が出来た。それが著しく発達し、文化・文明を創ることの出来る現在の脳となったのである。脳進化からみると、本能・情動の心のプログラムは体のプログラムの働きを良くするものであるが、体のプログラムばかりでなく、知性・理性の心のプログラムの働きにも関係するのである。

子どもに関係する私達は、情動の働きの重要性を考え、子ども達が生きる喜びいっぱい(joie de vivre)になれるよう、その脳科学的な仕組みを明らかにするため「子ども生命感動学」“Child BioEmotinemics”を体系づける必要がある。